

イザヤ書3-5章 「高ぶりを低くされる主」

1A 取り除かれる支え 3-4

1B 首領たち 3

1C 若者の支配 1-15

2C 傷を受ける女 16-26

2B ひとりの男 4

2A 神の嘆き 5

1B 酸いぶどう酒 1-7

2B 忌まわしいもの 8-25

3B 遠くの国々からの襲撃 26-30

本文

イザヤ書 3 章を開いてください。私たちはイザヤ書の学びに先週から入りました。イザヤは、ウジヤという王の治世の時から預言を始めました。ウジヤの時代は、ユダの国が、ダビデとソロモンが王であった時以降、もっとも力ある、栄えた時代にありました。そして、ウジヤ自身は主を求めている人でありました。主の助けでそうなったのです。けれども、心の中がいつの間にか、主ご自身ではなく、他のものに頼り頼んでいったのです。それでイザヤが、その心の移り変わりを早くから気づき、それで主の言葉を伝えたのです。彼らは、神に育てられたからこそ、反抗する男子のように反逆した。そして、神から離れ、自分の都合で動く神々へ移ってしまったと伝えています。

その中で主は、終わりの日における幻を示されました。エルサレムが、最も高い山となり、そこに世界中から諸国の民が上ってきます。なぜなら、そこには主の宮があり、そこに主ご自身、再臨のキリストがおられるからです。そして、主は御言葉を語られます。その御言葉の教えによって、国々は戦いことをやめ、その力と富を農業へ転換し、世界に平和と繁栄が満ちます。この終わりの幻を、私たち教会は御霊によって受けています。キリストことが主であられ、第一である方であることを私たちは礼拝によって示します。それから、主の権威ある教えを聞いて、それに従います。そうすれば、そこから人々の神の平和が広がっていきます。終わりの日の幻は、キリスト再臨後の姿であると同時に、私たち教会が御霊によってその前触れを証していくのです。

けれども、ユダの国は主を求めるのではなく、占いなどの異教的なものによって先を見ようとしていました。それから、金銀で満ちているその富により頼んでいました。さらに軍備もしっかりしていたので、自分たちは安心で平和であると思っていたのです。そこで主は御怒りを終わりの日に、ご自分の民に示されます。再臨の時の栄光の輝きで、彼らはその恐ろしさで岩間の中に隠れるのです。こうやって、主は人々の高ぶりを低くされ、ご自分だけが神であること、高められるべき名であることを示されたのです。

1A 取り除かれる支え 3-4

そして 2 章最後に、こうあります。「2:22 鼻で息をする人間をたよりにするな。そんな者に、何の値うちがあるか。」ここが彼らの問題の根っこにありました。彼らは、人に依存していました。主に對する高ぶりのその根本に、他の人々に依存していたので、それで主なる神に対してその愛を冷やし、その御言葉をないがしろにしたのです。私たちの信仰生活にとっての敵は何か？それは、無気力や無関心でしょう。主に對する熱心が出てこない。御言葉を聞いても、楽しくない。それは、すべての喜びと楽しみを与える主ご自身なのに、他のものに頼っているからに他なりません。3 章以降の学びは、人が依存している様々なものを主が取り除かれることによって、裁きを行なわれる幻から始まります。

1B 首領たち 3

1C 若者の支配 1-15

3:1 まことに、見よ、万軍の主、主は、エルサレムとユダから、ささえとたよりを除かれる。…すべて頼みのパン、すべて頼みの水、3:2 勇士と戦士、さばきつかさと預言者、占い師と、長老、3:3 五十人隊の長と高官、議官と賢い細工人、巧みにまじないをかける者。

主は、彼らが拠り頼んでいた、いくつかのものを取り除かれます。一つは、生きていくのに不可欠な食べ物と水です。これが無くなるということは、恐ろしいですね。地震や津波、洪水など、日本においても最も基本的なこの二つの必要を脅かされる時に、この言葉は実感することができるでしょう。その時に主に祈り求めればよいのですが、ユダの民はそれをしませんでした。なぜなら、他にも頼ることができる人々がいるからです。その国の指導者が何とかしなければいけない、として主に向かず、行政に向かいます。しかし、主はそれをも取り除かれます。さらに、日本であれば自衛隊が災害時に動いてくれます。しかし主は、当時のユダにおいてそうした軍人も取り除かれます、つまり彼らが助けに来てくれないのです。外敵が、こうした国の弱体化や混乱を利用して攻めてくるのですが、彼らが守ってくれません。そこで主に頼ればよいのですが、そうではなく占いに頼みます。しかし、占いも意味がないように神はされます。

3:4 わたしは、若い者たちを彼らのつかさとし、気まぐれ者に彼らを治めさせる。3:5 民はおのの、仲間同士で相しいたげ、若い者は年寄りに向かって高ぶり、身分の低い者は高貴な者に向かって高ぶる。3:6 そのとき、人が父の家で、自分の兄弟をとらえて言う。「あなたは着る物を持っている。私たちの首領になってくれ。この乱れた世を、あなたの手で治めてくれ。」3:7 その日、彼は声を張りあげて言う。「私は医者にはなれない。私の家にはパンもなく、着る物もない。私を民の首領にはしてくれるな。」

主に拠り頼むのではなく、とにかく人に拠り頼もうとします。しかし、治めるのに経験のある者たちにが頼りにならないということで、若者を、未熟な者を立てます。ここでは必ずしも年齢だけでなく、靈的な成熟度も含みます、未熟な者、気ままな者ということです。テサロニケの人に、パウロが指導者を、愛をもって尊敬しなさいということをお話しました。「1テサロニケ 5:12-13 兄弟たちよ。あ

あなたがたをお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。お互いの間に平和を保ちなさい。」強制ではなく、愛をもって労苦ししている人々を尊敬することは、そこに平和が生まれます。反対に言いますと、主に拠り頼まず人に拠り頼んでいると、そうした尊敬が消えて、他の人を立てようと動きます。けれども、状況はもっと酷くなります。それで、「ではこの人にやってもらおう」と、際限なく頭のすげ替えをおこなうのです。ここにあるように「相虐げる」が起こるのです。

ユダの国で、それが起こりました。その初代王、レハブアムのところに重税を軽くしてほしいという訴えをしにきた者たちがありました。長老たちは「その通りにしてあげてください。」と言ったのに、同年代の助言者たちは「もっと重くするべきだ」と言いました。それで何が起こったのか、平和ではなく分裂です。そして北イスラエルでは末期に、その王の治世は非常に短いものになっています。その家臣が王を暗殺して自分が王になるからです。いつまでも自分が主の前に出ていのではない、人のせいにして、人に依存していくと、ユダの国が弱く、貧しくなっていくように、弱くなります。

3:8 これはエルサレムがつかずき、ユダが倒れたからであり、彼らの舌と行ないが主にそむき、主のご威光に逆らったからである。3:9 彼らの顔つきが、そのことを表わしている。彼らは罪を、ソドムのように現わして、隠そうともしなかった。ああ、彼らにわざわざあれ。彼らは悪の報いを受けるからだ。

これが根っこにある問題です。高ぶりです。その言葉において、行ないにおいて主の前に出ていけない、へりくだらない、祈らないということがあります。衣を引き裂くのではなく、心を引き裂かない。主の前で泣かないことがあります。そうではなく、むしろ「なぜ、主はこのようなことをされるのか。」とかえって、起こっていることに対して主を非難します。あるいは、「こんなことをやっても、主は見えておられないさ。」といって、神を無視します。私たちが試練を受けると、心に苦みが入る、また心に霊的な無気力が起こって、こういう態度になるのです。

けれども、心の奥底では自分たちが悪いことをしていることは分かっています。だから顔つきが、自分たちが逆らっていることを隠せないのです。そして、そうした自分の態度が恥ずかしいと思わないで大胆に見せてしまいます。ソドムの者たちがその同性愛の強姦を大胆に行なおうとしたように、彼らは隠すことをしていないと言っておられます。

3:10 義人は幸いだと言え。彼らは、その行ないの実を食べる。3:11 悪者にはわざわざあれ。わざわざが彼にふりかかり、その手の報いがふりかかる。

主は、このように厳しい言葉を語られているのは、あくまでも悔い改めに導かれるためです。彼らが滅びることを望まれていないのは、主ご自身です。ですから、悔い改める者、へりくだる者を「義人」と呼ばれています。このような者たちは幸いであり、その行為の実を確かに食べることができ、へりくだりは無駄には終わらないことを教えています。

3:12 わが民よ。幼子が彼をしいたげ、女たちが彼を治める。わが民よ。あなたの指導者は迷わす者、あなたの歩む道をかき乱す。

先ほどは若い者を指導者にすることが書かれていましたが、今は幼子をユダの民が支配すると言っています。そして女たちが治めると言っています。これは、それだけ自分たちが貶められたことを強く言うために、主が選ばれた表現です。これは、女の指導者だから自動的に卑しめられているわけではありません。士師にはデボラがいました。ペルシヤの王妃エステルがいました。けれども、イスラエルやユダの国が罪を犯している時に、そこに女が出てきてとてつもない圧政になる記録があります。北イスラエルではイゼベルでした。それは彼らがヤロブアムの時からの偶像を拝み続けたから、その先がイゼベルによるバアル礼拝だったのです。それからユダではアタルヤがいました。彼女の前には、北イスラエルと仲良くしてバアル礼拝を取り入れたユダの王たちがいたからです。王であるアハズヤがエフーによって殺されたので、その後で他の王の一族を殺して自分が女王となりました。

3:13 主は論争するために立ち上がり、民をさばくために立つ。3:14 主は民の長老たちや、民のつかさたちと、さばきの座にはいる。「あなたがたは、ぶどう畑を荒れすたらせ、貧しい者からかすめた物を、あなたがたの家に置いている。3:15 なぜ、あなたがたは、わが民を砕き、貧しい者の顔をすりつぶすのか。・・万軍の神、主の御告げ。・・」

主は再び場面を、法廷に戻しておられます(1:2,1:18)。そして、長老たち、つかさたちを裁判の席に着かせます。このような状況になったのは、元を正せば彼らがきちんと治めていなかったのです。民を虐げていたからです。「顔をすりつぶす」とありますが、ひき臼でひくことを意味します！けれども、貧しい者、弱まっている者を助ける働きを導くために指導者は立てられています。教会にも同じ原則があります。「ローマ 15:1-2 私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。」「1テサロニケ 5:14 兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。」

2C 傷を受ける女 16-26

3:16 主は仰せられた。「シオンの娘たちは高ぶり、首を伸ばし、色目を使って歩き、足に鈴を鳴らしながら小またで歩いている。」それゆえ、3:17 主はシオンの娘たちの頭の頂をかさぶただらけにし、主はその額をむき出しにされる。

イザヤは、ユダの高ぶっている姿を、このように女に喩えて表現しています。1章でも同じことをしていましたね、「どうして、遊女になったのか、忠信な都が(1:21)」と言っていました。ここでは、性的な魅力をつかって男を引きつけようとしている姿です。また、飾り物や衣服を見せびらかせている姿です。人に依存していることです、また依存することによって人に対して支配的になり、相手を思うように操作し、究極的には自己愛に浸っています。ユダがまさにそのような姿でした。しかし、

高ぶりというのは、その後に破滅が来ると箴言は教えています。主は、こうした高ぶりを低められます。

3:18 その日、主はもろもろの飾り・足飾り、髪の毛の飾り、三日月形の飾り物、3:19 耳輪、腕輪、パール、3:20 頭飾り、くるぶしの鎖、飾り帯、香の入れ物、お守り札、3:21 指輪、鼻輪、3:22 礼服、羽織、外套、財布、3:23 手鏡、亜麻布の着物、ターバン、かぶり物を除かれる。3:24 こうして、良いかおりは腐ったにおいとなり、帯は荒なわ、結び上げた髪ははげ頭、晴れ着は荒布の腰巻きとなる。その美しさは焼け傷となる。

いや～、よくもまあいろいろな飾り物を身につけていましたね。そして衣装もすごいです。そこにさりげなく、「お守り札」もあります。そして主が裁かれる時に、その良い香りが腐った臭いとなります。これは、ユダの人々が外敵に捕えられることを指しています。そこで、そのような香りも長いこと風呂に入っていないで、捕え移されているので、腐った臭いとなるということです。そして禿げ頭にされるというのは、女性にとっては屈辱的なものです。それから、「焼き傷」とありますがこれは女奴隷の体に押す焼き印のことです。

3:25 あなたの男たちは剣に倒れ、あなたの勇士たちは戦いに倒れ、3:26 その門はみな、悲しみ嘆き、シオンはさびれ果てて地に座す。

男たちは戦いによって倒れて、残されているのは女ばかりになります。そしてシオンがさびれてしまうということです。これは具体的には、バビロンによるエルサレム破壊、紀元前 586 年に成就しました。このように、神は主に頼るべき民が、人間に依頼したことによってどんどん自分を破壊していく姿を、女にして描きました。

2B ひとりの男 4

しかし、そこで彼女が何もなくなる時に、そこから主への信頼が生まれます。人への依存から、主への信頼が生まれます。

4:1 その日、七人の女がひとりの男にすがりついて言う。「私たちは自分たちのパンを食べ、自分たちの着物を着ます。私たちをあなたの名で呼ばれるようにし、私たちへのそしりを除いてください。」

「その日」とあります。これは主がお定めになった、ご自分の計画を完成される日のこと、具体的には終わりの日のことです。ここに書かれているのは、男がとても少なくなったので、けれども当時の女にとっての最も屈辱的なことは、結婚をできず、子を産むことができないということです。それで、なんと他の安全保障である、食べること、着ることは自分で賄いますから、どうか私と結婚してください、とお願いします。

けれども、ここはすばらしい救い主の約束になっています。この「ひとりの男」というのは、キリスト自身です。2 節に、そのメシヤ到来の約束が続いています。ユダの民が、全く自分が外敵に虐げられて、また滅ぼされてしまうという時に、その心は全く砕かれます。へし折られます。その時に主の前に出ます。そこで救ってくださる方がキリストだということです。高ぶる心が砕かれて、勇気を出して主ご自身のところに行けば、そこにあるのは美しい主ご自身との愛の関係です。主が私たちが御霊で聖めてくださり、私たちが聖なる者となり、主の栄光を見上げることのできる、その美しい関係に入ります。

4:2 その日、主の若枝は、麗しく、栄光に輝き、地の実は、イスラエルののがれた者の威光と飾りになる。4:3 シオンに残された者、エルサレムに残った者は、聖と呼ばれるようになる。みなエルサレムでいのちの書にしるされた者である。

「主の若枝」というのは、キリストに対する代表的な呼び名の一つです。ダビデがその生涯の終わりに、歌をうたいました。「2サムエル 23:5 まことにわが家は、このように神とともにある。とこしえの契約が私に立てられているからだ。このすべては備えられ、また守られる。まことに神は、私の救いと願いとを、すべて、育て上げてくださる。」主が、このダビデと契約を結んでくださり、主の救いとその子孫から生まれ出ることを教えてくださいました。それまで、イスラエルが小さく、周囲の敵に虐げられ、けれども王が立てられることによって救いもたらされます。その究極がキリストであり、キリストはイスラエルを救い、それだけでなく異邦人たちもご自分のものとします。2 章で見た通りです。それを、「育て上げてくださる」という言葉をもって言い表しています。ダビデの後に、そのずっと後に主が、救いが現われる時までを育て上げてくださるということです。そして、時が満ちた時にキリストが現れてくださいました。イエス様は、「わたしが律法と預言者を成就しに来たのだ。」と宣言されました。救いが訪れたのです。

そこで、「若枝」という言葉がキリストに使われたのです。これから御国としての大きな枝を張るのだという期待をもって、小さきところから出てくるその希望が「若枝」と呼ばれるのです。11 章 1 節に、イザヤは彼のことをこう預言しました。「11:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」エッサイは、ダビデの父のことです。つまりダビデからキリストが出てくるということです。そしてエレミヤが預言しました。「23:5-6 見よ。その日が来る。…主の御告げ。…その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起す。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行なう。その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は、『主は私たちの正義。』と呼ばれよう。」

そして、「イスラエルののがれた者」がいることを教えてくださいました。イザヤが一貫して語っている人々のことです。1 章 8-9 節にも、残された者が「ぶどう畑の小屋のように」と書いてあります。自分の高ぶりがつぶされて、主の前にへりくだり、主の御名を呼び求めるイスラエル人たちのことです。主が初めに来られた時に、その慰めを得た人々は少なかったです。福音書では、キリストはご自分の民のために来られたのに、彼らは受け入れなかったと書いてあります。しかし、受け入れ

た者、残された者はいました。十二弟子はもちろんのこと、初めの信者たちはみなユダヤ人でした。そして異邦人に宣教したパウロ自身が、生粋のヘブル人でした。

しかし、福音は異邦人の間で広がり、実を結びました。それが今に至るまで続いています。そしてこれから、地はさらに不法で満ち、主が御怒りを下されます。そして諸国はイスラエル、エルサレムに向きます。もう既に、エルサレムは世界紛争の焦点になっています。そして、そこで再建される神殿の中に入る、荒らす憎むべき者、反キリストが現れます。その不法の人が現れたら、イエス様は山々に逃げなさいと言われました。その時に、かつてない、これからもない大患難が来ると言われました。その時に日数が少なくされなかったら、選びの民は救われることはないだろうとイエス様は言われます。これが、イスラエル人たちです。「イスラエルののがれた者」とイザヤは言いましたが、その荒野の山々に逃げた者たちのために、主イエスが戻って来られます。そして、滅ぼそうとする諸国の軍隊を打ち滅ぼしてくださいます。

そして「シオンに残された者」ともあります。エルサレムにいる者たちです。諸国の軍隊はエルサレムに住んで留まっている者たちを全滅させるべく攻めてきます。そこに主が来られます。そして彼らを滅ぼされます。こうして彼らは救われますが、その時にその救い主は自分たちがかつて、付き刺した者であることを悟るのです。「ゼカリヤ 12:9-10 その日、わたしは、エルサレムに攻めて来るすべての国々を捜して滅ぼそう。わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。」そして 14 章 1 節には、「ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。」とあります。

そして彼らが、「聖と呼ばれるようになる。みなエルサレムでいのちの書にしるされた者である。」とありますね。すばらしいです、私たちも同じ、高慢が砕かれて主に出会う時、御霊で聖なる者とされます。そして、その救いは、私たちが命の書に記されていることを表しています。終わりの日に救われるこれら、イスラエルの人々も同じです。そして、天には書物があります。モーセが、民のために執り成した時、「あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。(出エジプト 32:32)」と言いました。そして黙示録には、サルデスにある教会に対して、「わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。(3:5)」と言われました。イエス様は、自分の名が天で書き記されていることを喜びなさいと言われました(ルカ 10:20)。

4:4 主が、さばきの霊と焼き尽くす霊によって、シオンの娘たちの汚れを洗い、エルサレムの血をその中からすすぎ清めるとき、4:5 主は、シオンの山のすべての場所とその会合の上に、昼は雲、夜は煙と燃える火の輝きを創造される。それはすべての栄光の上に、おおいとなり、仮庵となり、4:6 昼は暑さを避ける陰となり、あらしと雨を防ぐ避け所と隠れ家になるからだ。

レビ記において、月のものがある女は不浄の期間に入ったことを言っています。そのところから、

これまで高ぶりの中にいたシオンの娘たちがすすぎ清められたと表現しています。それは、「さばきの霊と焼き尽くす霊」によってであるとあります。水によっても清めはありますが、火による清めはもっと徹底的ですね。私たちが熱湯消毒をしますが、同じ原理です。そして、主が私たちを天に招き入れる時に、つまり携拳の後に、同じような火があるのだということをパウロは教えています。「1コリント 3:15 もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」

そして、主が共におられること、それによって災いから守られることを、昼の雲と夜の火の輝きで示してくださる約束があります。これはもちろん、出エジプトの荒野における主の守りの働きと同じものです。主がかつてイスラエルを砂漠の苛酷さ、その熱さと寒さから守られたように、主の臨在が彼らの安全保障となってくれます。

2A 神の嘆き 5

1B 酸いぶどう酒 1-7

5:1 「さあ、わが愛する者のためにわたしは歌おう。そのぶどう畑についてのわが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹に、ぶどう畑を持っていた。5:2 彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。ところが、酸いぶどうができてしまった。

午前礼拝で説教した、「わが愛する者の歌」です。イスラエルには、ぶどう畑が多くあります。主に岩地であるイスラエルは、まず石を取り除くところから始めます。あるいは坂にぶどう園を作ることもあり、石を積み上げて平らな土地を作るところから始めます。そして、酒ぶねも遺跡で残っています。足で押して、それから流れ出る汁を受け取るようにさせます。ここまでの手間をかけたのですが、甘いぶどうではなく、酸いぶどうが実ってしまいました。ここまでは、甘い歌であったのですが、けれども酸いぶどうができてしまったと興ざめするようなことを言って、それでイザヤは聞いていた者たちに説教します。

5:3 そこで今、エルサレムの住民とユダの人よ、さあ、わたしとわがぶどう畑との間をさばけ。5:4 わがぶどう畑になすべきことで、なお、何かわたしがしなかったことがあるのか。なぜ、甘いぶどうのなるのを待ち望んだのに、酸いぶどうができたのか。

ここでの法廷の場面ですが、今度はエルサレムの住民とユダの民を裁判官にしています。そして、裁かれているのは神ご自身とそのぶどう畑です。神がイスラエルにくださったその手塩をかけて行為で、不足があるかどうか、裁いてほしいと言いました。ユダの民は、愛されなかったから神を求めなかったのではありません。むしろ愛されていたからこそ、それに反抗して悪い実を結んだのです。

似たようなことを、預言者サムエルがイスラエルの民に言いました。「1サムエル 12:3 さあ、今、

主の前、油そそがれた者の前で、私を訴えなさい。私はだれかの牛を取っただろうか。だれかのろばを取っただろうか。だれかを苦しめ、だれかを迫害しただろうか。だれかの手からわいろを取って自分の目をくらましたらうか。もしそうなら、私はあなたがたにお返しする。」サムエルはイスラエルの民のために労苦し、預言活動を行ない、彼らのために祈りました。しかし、彼らがイスラエルには周りの国々のように王が必要だということで、サムエルを退けてしまったのです。なぜか？この時からイスラエルの民には大きな問題があったのです。「神に拠り頼んで生きるのではなく、人を代わりにして依存したい。」ということなのです。私たちが愛してやまない神なのですが、その関わりに関わりたくない、そういったことは他の人間に任せればいいでしょう、ということです。

5:5 さあ、今度はわたしが、あなたがたに知らせよう。わたしがわがぶどう畑に対してすることを。その垣を除いて、荒れすたれるに任せ、その石垣をくずして、踏みつけるままにする。5:6 わたしは、これを滅びるままにしておく。枝はおろされず、草は刈られず、いばらとおどろが生い茂る。わたしは雲に命じて、この上に雨を降らせない。」

主を退けるまでは、当たり前、当然の権利としていた豊かさが、彼らが退けることによってなくなってしまいます。ここに出てくる荒廃は、神が頭に来て、いじめようとして行なわれたのではなく、彼らが主の関わりを拒むので、主がその守りの手を引かれたからこそ起こった事です。私たちは、主から守られています。愛されています。そして教会はその愛を示すところです。ところが、それを覚えずに反抗するならば、その守りから外れてしまうこととなります。

パウロが、コリントの教会に対して、近親相姦の罪を犯しているのに悔い改めていない男について、こう言いました。「1コリント 5:4-5 あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」罪を犯している時は分からないのですが、教会から除名されることによって、その守りがなくなりサタンの影響下にもろ入ることとなります。

5:7 まことに、万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家。ユダの人は、主が喜んで植えつけたもの。主は公正を待ち望まれたのに、見よ、流血。正義を待ち望まれたのに、見よ、泣き叫び。

この流血と泣く叫びは、新約聖書では宗教指導者がイエス様に対してなされたことに当てはめられています。彼らが農夫として描かれており、ぶどう畑の主人の息子が後取りだから殺してしまおうと言ったというところに表れています。主の御言葉を心刺されることなしに聞くこと、また主の教会で自分の既得権を作って、自分に引き寄せる形でい続けること、これは霊的に流血や亡き叫びをもたらします。

2B 忌まわしいもの 8-25

そして主は、こうした不正をもたらしている、具体的な災いを語り始められます。

5:8 ああ。家に家を連れ、畑に畑を寄せている者たち。あなたがたは余地も残さず、自分たちだけが国の中に住もうとしている。5:9 私の耳に、万軍の主は告げられた。「必ず、多くの家は荒れすたれ、大きな美しい家々も住む人がなくなる。5:10 十ツエメドのぶどう畑が一バテを産し、一ホメル種の種が一エパを産するからだ。」

「ああ」というのは、「災いだ」という意味です。一つ目の災いは貪欲です。土地を買収し、占有する貪欲です。イスラエルには、土地について大切な掟があります。レビ記 25 章 23 節に、「地は買い戻しの権利を放棄して、売ってはならない。地はわたしのものであるから。あなたがたはわたしのもとに居留している異国人である。」とあります。そこは彼らの土地ですが、それは主が彼らに与えられたのであって、本質的には彼らのものではなく主のものなのです。そして、土地を売ってはならないというのは、主がそれぞれに与えられたものをいつまでも相続し、損なわれることのないようにするためです。それを、自分の金の力に任せて、貧しい人たちから土地を買い取り、また地代が高いので貧しい人が購入することがないようにしている、ということです。こうやって奪い取ることによって、貧しい人たちが泣き叫んでいます。

主は裁きとして、家を荒れすたれるに任せます。10 節は収穫量が非常に少なくなる、ということです。自分では蓄えているつもりでしょうが、それが、穴があいた袋のようにどんどん失われていきます。

5:11 ああ。朝早くから強い酒を追い求め、夜をふかして、ぶどう酒をあおっている者たち。5:12 彼らの酒宴には、立琴と十弦の琴、タンバリンと笛とぶどう酒がある。彼らは、主のみわざを見向きもせず、御手のなされたことを見もしない。

二つ目の災いは「遊興」です。遊興の問題は何であるか、説明しています。主の御業を見ない、その御手の業を見ないということです。ですから、キリスト者と酩酊や遊興は正反対の行為です。エペソ書 5 章でパウロは、このことをはっきりと説明しています。「また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。(エペソ 5:18-19)」お酒とそれに伴う音楽であれば、主を忘れます。しかし聖霊に満たされ、主に賛美を歌うのであれば、それは主の御業をこれまで以上に思います。

5:13 それゆえ、わが民は無知のために捕え移される。その貴族たちは、飢えた人々。その群衆は、渴きで干からびる。5:14 それゆえ、よみは、のどを広げ、口を限りなくあける。その威光も、その騒音も、そのどよめきも、そこでの歓声も、よみに落ち込む。5:15 こうして人はかがめられ、人間は低くされ、高ぶる者の目も低くされる。5:16 しかし、万軍の主は、さばきによって高くなり、聖なる神は正義によって、みずから聖なることを示される。5:17 子羊は自分の牧場にいるように草を食べ、肥えた獣は廢墟にとどまって食をとる。

主の裁きは、彼らを死に至らしめることによって現れます。そうした遊興の声が聞こえなくなるほど、多くの人々が陰府の中に落ち込みます。ユダの土地が、僅かに子羊がいるところ、獣がいるところとなりほぼ無人地帯になるというのです。そしてその目的は、高ぶる者を低めるためであり、ただ主が高められるためだ、ということです。

5:18 ああ。うそを綱として咎を引き寄せ、車の手綱できるように、罪を引き寄せている者たち。
5:19 彼らは言う。「彼のすることを早くせよ。急がせよ。それを見たいものだ。イスラエルの聖なる方のはかりごとが、近づけばよい。それを知りたいものだ。」と。

三つ目の災いは、「嘘、偽り」です。一つ目と二つ目の災いが肉の欲に関わるものでしたが、ここから精神に関わるもの、思いの中で犯す罪の類いです。偽りを語ることは、必ず聖なる神への恐れに会います。なぜなら神は真理であり、その神に違反する行為だからです。しかし、心の中であえて神への恐れを抑圧しなければ、嘘をつくことができません。ここでは、「嘘をついたところで、神が何か私に罰を与えるのかい。やってみるならやってみろ。」という嘲りであります。

5:20 ああ。悪を善、善を悪と言っている者たち。彼らはやみを光、光をやみとし、苦みを甘み、甘みを苦みとしている。

四つ目の災いが、真理を曲げる罪です。嘘が、自分が間違っていると分かっているながら犯す罪であるのに対して、こちらはその悪を善だと言ってしまうところで、もっと悪質です。神に対して、「おまえは罪人だ」と言って、「私がお前よりも正しい」と言っているのです。これは、現代社会の中に蔓延している高ぶりです。教会の中にさえ入ってきます。罪を罪であると語ると、「それは、愛ではない」と言います。これは単純に、罪を善としているだけです。

5:21 ああ。おのれを知恵ある者とみなし、おのれを、悟りがある者と見せかける者たち。

五つ目が、知的高慢です。悪を善とするだけでなく、それを知識で理論武装します。ローマ 1 章には、「彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり(22 節)」とあります。自分の悟りは正しいのだと自己慢心に浸っています。

5:22 ああ。酒を飲むことでの勇士、強い酒を混ぜ合わせることにかけての豪の者。5:23 彼らはいろのために、悪者を正しいと宣言し、義人からその義を取り去っている。

六つ目の災いが、「裁きを曲げる」ことであります。箴言に、レムエルという王に対してその母が言った言葉があります。「31:4-5 レムエルよ。酒を飲むことは王のすることではない。王のすることではない。「強い酒はどこだ。」とは、君子の言うことではない。酒を飲んで勅令を忘れ、すべて悩む者のさばきを曲げるといけないから。」

こうやって一つ目の災いから、最後の災いを見ると一つなぎになっています。貪欲から遊興、それから嘘、真理を曲げる、自己慢心、そして裁きを曲げることです。すべてが「高ぶり」という共通項があります。

5:24 それゆえ、火の舌が刈り株を焼き尽くし、炎が枯れ草をなめ尽くすように、彼らの根は腐れ、その花も、ちりのように舞い上がる。彼らが万軍の主のみおしえをないがしろにし、イスラエルの聖なる方のみことばを侮ったからだ。5:25 このゆえに、主の怒りが、その民に向かって燃え、これに御手を伸ばして打った。山々は震え、彼らのしかばねは、ちまたで、あくたのようになった。それでも、御怒りは去らず、なおも、御手は伸ばされている。

主によって、彼らが死に絶えます。その理由が、「万軍の主のみおしえをないがしろにし、イスラエルの聖なる方のみことばを侮った」というところにあります。2章の、終わりの日におけるシオンの山を思い出してください。そこから主の御言葉が、その教えが広がりました。ここから離れてしまったからこそ、彼らは滅びることになってしまいます。そして、「それでも、御怒りは去らず、なおも、御手は伸ばされている。」と言っています。なぜなら、彼らはこのような窮地にいてもなおのこと、悔い改めていないということです。それで、主は最終的な裁きを行われます。

3B 遠くの国々からの襲撃 26-30

5:26 主が遠く離れた国に旗を揚げ、地の果てから来るように合図されると、見よ、それは急いで、すみやかに来る。5:27 その中には、疲れる者もなく、つまづく者もない。それはまどろまず、眠らず、その腰の帯は解けず、くつひもも切れない。5:28 その矢はとぎすまされ、弓はみな張っており、馬のひづめは火打石のように、その車輪はつむじ風のように思われる。5:29 それは、獅子のようにほえる。若獅子のようにほえ、うなり、獲物を捕える。救おうとしても救い出さず者がいない。5:30 その日、その民は海のとどろきのように、イスラエルにうなり声をあげる。地を見やると、見よ、やみと苦しみ。光さえ雨雲の中で暗くなる。

主が行われる最終的な裁きは、この遠く離れた国からのものです。それは、アッシリヤから来て、その後バビロンから来ます。このことをもって、主はご自分に怒りを満足されます。

これでイザヤのウジヤの時代の預言が終わります。6章からは、彼が改めて主に呼ばれて、遣わされる時です。ここからが興味深いです。なぜなら、ウジヤの時はまだ表面的には良い状態だったのですが、アハズが王になってからユダがとんでもないことになります。さらに悪くなるその状況の中で、その中でも預言ができるようになるためには、それは、彼自身が汚れていることを知ることでした。これだけ災いだ、と叫びましたが、実は自分自身が災いだったのです。それを悟れたのは彼自身が、聖なるイスラエルの神を知ったからです。そのことによって、とてつもない激しい圧力にも耐え、主の言葉を取り次ぐことができます。自分がもうだめだ、けれども主が遣わされているというその召命が、イザヤを支えていくことになります。